

再読 関西近代建築  
— 論考・記事編 —

7

公園特集号  
椎原兵市「天王寺公園の沿革と全貌」他

『建築と社会』第17輯第4号  
(昭和9年4月号)

山形政昭

大阪芸術大学

この特集号は昭和8年(1933)末に完工した大阪市営の天王寺公園改修工事の記録を中心として、大阪における当時の公園整備についての報告記事を集録したものである。寄稿者には大阪市公園課の椎原兵市、方米治郎、大阪市営繕課の富士岡重一らが並び、住友家寄付による茶白山一帯を含めた天王寺公園に関する詳しい沿革及び改修工事記録となっている。

ところで、大阪の公園整備計画について『建築と社会』誌上では片岡安「我国都市改良計画の将来」(大正7年5月号)をはじめとして、「庭園と建築号」(昭和2年10月号)、「林泉と庭園号」(昭和4年10月号)、「建築と風致号」(昭和5年4月号)などがあり、それらを通して都市計画事業の大きな成果の一つとしての天王寺公園が分かる。

建築と社会

第17輯第4号 昭和9年4月発行

公園

目次

|                |            |
|----------------|------------|
| 新天王寺公園の沿革と全貌   | (1)        |
| 天王寺公園の沿革と全貌    | 椎原兵市(17)   |
| 動物飼育の立派から見た動物園 | 林 俊市(24)   |
| 天王寺公園の建築物に就いて  | 富士岡重一(36)  |
| 天王寺公園の改修工事     | 方米治郎(38)   |
| 動物舎等           | 吉田秀雄(42)   |
| 大阪府営公園とその歴史的施設 | 加藤 晋(46)   |
| 大阪市営公園の沿革と全貌   | 大阪市公園課(53) |
| 園路新建築          | (65)       |
| 乾式舗装建築の材料      | (71)       |
| 時 報            | (76)       |
| 會員のこゝろ         | (79)       |
| 會 報            | (79)       |

■天王寺公園の概要

周知のように、天王寺公園は明治36年(1903)に開催された内国勸業博覧会会場の跡地で、大阪市はその東側約34,300坪を天王寺公園として整備を進め、明治42年(1909)10月に開園したものである。市営公園としては明治33年(1900)の中之島公園に次ぐものであった。

ここで、大正～昭和初期の市営公園の計画を先導した椎原兵市の「天王寺公園の沿革と全貌」の記録をたよりに、その後の発展を要約すると、開園翌年の明治43年(1910)に早くも西側に拡張し、運動場一帯を加え、大正4年(1915)に動物園を整備、開園している。その頃には園内に、武徳殿、勸業館、公会堂、市民博物館が新設され、温室が改造されて植物園として開園したという。さらに大正11年(1922)3月に住友家より茶白山別邸(慶澤園、茶白山の17,523坪)の寄付があり、加えて河底池の3,000坪が園地に加えられた。これによって公園敷地は開園時のほぼ2倍となる約68,000坪となったという。

それより先の大正9年(1920)2月に大阪市では美術館の建設が立案され「大阪市美術館新築設計」コンペにより、1等前田健二郎案ははじめ入選作が『建築雑誌』(大正9年11月号)に発表されている。コンペの要項には、天王寺美術館とは記されていないものの、内容より現地を想定したものであり、住友家の寄付に先立つコンペとして興味深い。美術館の建設は遅れ、昭和2年(1927)に至り着工、昭和5年(1930)に躯体工事が完

了したが仕上げ工事はさらに遅れて昭和11年(1936)に竣工した。その経緯についてはここでは触れないが、「大衆に開放された美術の殿堂であり」「文化都市としての茲に点睛をなせる」<sup>2)</sup>ものだった。

一方、大正14年(1925)の大阪市域拡張による大正の到来を期して、毎日新聞社の寄付による音楽堂が建てられ、昭和を迎える。そして第2次都市計画事業における公園増設計画の一つに加えられ改修計画がなされ、第14回失業応急事業として昭和7年(1932)に着工、翌年9月に竣工した。その間の昭和8年に公園一帯が風致地区指定を受けている。

改修工事の内容は①南東部の植物温室及び花壇一帯、②花壇の西側につづく日本式庭園、③運動場及び音楽堂一帯、④動物園一帯、⑤茶白山及び慶澤園一帯であり、殆ど全域における改修が加えられた。しかしそれは単なる改修ではなく、開園以来の蓄積を踏まえた総合的な整備であったところに特色がある。そして天王寺公園は「何と云つても大阪の代表的大公園で面積地況に於ても内容施設より見ても、又位置交通より云つても、市民が利用する点の多少からしても当然第一位を占むべきで、殊に改修工事を了つた今日に於ては、我国の都市公園として決して恥かしくない程度に整つて来た」という。

■建築物に就いて

市営繕課長にあった富士岡重一は「天王寺公園の建設物を述ぶるに方つて、仮りに総合的な公園に形造つてゐる、各ブロックを区画

天王寺公園平面圖



天王寺公園平面図(第17輯第4号1頁)

して見るならば、児童遊戯場・運動場・学園(公会堂・美術館・音楽堂・博物館一帯)・日本庭園・植物園を含む花壇方面・動物園等に大別することが出来る」と説明するのであるが、とりわけ美術館ブロックについて、次のように述べ、空間的、文化的計画性を指摘している。

「美術館は……大阪市にとっては、亦其の文化を語る一つの代弁者となるものである。それに中之島にあった、三井家の門廊(引用者注:旧黒田藩蔵屋敷門)を配し、正面にはフロントアベニューと前庭とを設け、……背面には茶臼山の古雅な深苑が、美術館をして落着きのあるものにしてある」

つまり、美術館の立地について(昭和9年(1934)の時点では美術館の仕上げ工事途上にあった)、西正面は新世界に向かって、広場と軸線が伸び、一方背面には歴史をもつ庭園ゾーンを配し、加えて公園側のゲートとして、近世中之島の歴史的門屋を置くことで、歴史と近代をクロスさせた総合的文化を物語る処と特色を指摘する。

つぎに、花壇ブロックについては噴水等のモダンな造形について、動物園ゲートと南園に通じる地下通路の計画的特色についてなど、種々の特色を述べている。

## ■天王寺公園整備に至る都市計画

大阪市における公園計画については、明治に遡って山口半六の「大阪市新設市街設計書」にその端緒が見られるが具体化に至ることは無かったとされる。大正期に入り本会創立翌年の『関西建築協会雑誌』第1輯7～8号(大正7年5～6月号)において、片岡安の論説「我国都市改良計画の将来(上、下)」があり、公園について僅かだが触れている。曰く、都市計画における重要項目として、港湾棧橋、幹線道路に始まり「遊園地、公園其他の娯楽場と幹線街路の連絡」を挙げているのであり、行政、公館の配置に関するなかで、「博物館、美術館、図書館、……何れも街路系統の重要分子をなすものであるから、其配置及計画は決して個々に考ふべきものでない」としている。

片岡の都市計画に関する大所からの論説は、その後も「都市の改善(上、下)」(大正10年6～7月号)など間断なく発せられ、府にあった池田實らと共に、市街地建築物法の定着にも努めたことが知られている。その後、関東大震災を経て昭和に入る時期、本誌上においては都市環境に関する論説が際立つ。そうした一つに片岡の「現代都市と公園(都市の緑化問題)」(昭和2年10月号)があり、時論を集録したまとめとして、「新たに都市公園として開設する場合には決して日本式の庭園

に擬すべきものではない。主として市民一般の心身を休め快活の気分を養ふに最も適当なる緑地々帯となさねばならぬのである。公園の配置及施設に就ては論すべきこと甚だ多いのであるが、現代の都市としては、其増設拡張及改善に就て、最大なる努力を払はねばならぬ問題となつて来たことに先づ以て注意を払ふ必要がある。」としている。

片岡の本論につづき古宇田實の「庭園の実用化と芸術」があり、椎原兵市の「庭の建物に就て」がある。造園専門家として種々の庭園建造物を列記した後、大正14年に設計した千里山遊園地を事例に挙げて、音楽堂を兼ねた野外劇場などを紹介している。天王寺公園施設との関連あるものとして興味深い。

椎原はその2年後の本誌に「大阪の庭園に就いて」(昭和4年10月号)を記し、歴史的な名園の残存事例の少ないことを述べたのち、旧住友男爵邸庭園(慶澤園)を取り上げ、近代における池泉回遊式庭園の大規模にして大阪第一の庭園と評価し、当時の写真を巻頭に収めている。

昭和5年4月の本誌は「建築と風致」特集としている。そこで再び片岡は巻頭の論説で「建築と風致」と題し述べるなかで、都市公園に関して「……都市に於ける公園、遊園の拡張及改善が其都市建築の密集的に又高層式に発展せんとする調和剤として近代都市の努力せねばならぬ最も緊要なる事業……」という。加えて椎原の「風景地の建築物に就て、大屋霊城の「都市風景の構成」等が収められている。

昭和初期、大大阪時代の都市整備として御堂筋の拡張が進むなか、大阪城の再建と大礼記念大阪城公園整備も着手されており、それを反映した制度として風致地区の設定が論じられ、昭和8年に至って天王寺公園一帯も風致地区に指定されている。

こうした機運を背景として天王寺公園の改造は昭和8年に始まった。

## ■椎原兵市(1884～1966)の業績

明治40年(1907)京都高等工芸学校図案科卒業。宮内省内苑寮技手を経て、大正9年大阪市土木課に入る。大正13年(1924)より、昭和15年(1940)まで土木部初代公園課長に就いていた。関係者による『椎原兵市氏の作品と業績』(昭和41年(1966))があり広範な活躍が伝えられているなかで、方米治郎は「大阪市の初代公園課長」を寄せ、プロフィールなどかなり詳しく報じている。そこで氏の代表的な業績の第1として「天王寺公園及び動物園の改造拡張」を挙げており、加えて「2. 大阪城天守閣復興及び、大阪城公園設置」「3. 都市計画事業としての公園緑地

計画」そして「4. 新設道路の街路樹植栽と広場設置」とし、街路樹では御堂筋のイチヨウ並木が「大阪名所の風物詩」と讃えている。つまり大阪市の大正～昭和初期における都市計画事業、そして昭和の御大典記念事業における公園整備を計画主導した功績が知られるのである。

加えて大阪における由緒ある庭園調査にも取り組んでおり、それらの保存に努めていた。そうした一つに旧住友家茶臼山本邸庭園があり、先の「天王寺公園の沿革と全貌」において小川治兵衛による代表的名苑の一つとし、その由来を住友家で編まれた『慶澤園造営記』を引いて次のように記している。

「庭は……茶臼山町にあり、北は池を隔て、茶臼山に相対し東は名刹雲水に接す。西及南は通路を挟んで天王寺公園に臨む。此地をトシ造営の工を起せしは実に明治28年にあり、当時は付近一帯最も荒涼を極め、西北隅は俗に団栗山と称する高地にして雑木漫りに生ひ茂り、東部及北部には野生の竹叢あり、南部丘原も復殆ど無緑の瘦地たりしなり。かゝる荒廢の地も荊榛を拓き高低を整へ鋭意之が利用を図り、爾來明治41年に至る10数年の歳月を費し一萬三千坪の地域を買収し得て、漸く本園の結界を構ふることを得しものなり。更に邸外茶臼山の五千余坪の地も舊と岩崎男爵家の所有なりしを譲り受け、之を修補して益々佳致を加へ名勝として保存することせり。……」このように古来の地形を捉え、史的な価値を明らかにすることで慶澤園を公園の核心と位置づけたとしている。

\*

この公園特集号に記録された天王寺公園改造工事を通して、大阪の代表的都市公園としての天王寺公園のことはもとより、当時の土木部公園課の果たした仕事を知ることができる。つまり当時、煙の都、産業都市と言われてきたなかで推進されてきた、市域における緑地や公園、遊園空間としての成果と、大阪に形成された都市景観の一つとして見直すことができるだろう。

(やまがた まさあき)

註

- 植松清志の論考「再読 関西近代建築13 大阪市立美術館」(本誌平成22年4月号)がある。
- 富士岡重一「大阪市立美術館」(本誌昭和11年6月号)

参考文献

- ・椎原兵市の業績と作品出版委員会『椎原兵市氏の業績と作品』1966年11月
- ・財団法人大阪市公園協会『大阪市花と緑の行政史』2001年10月